

## 松本清張を読む

### 1. 新潮文庫「或る『小倉日記』伝』傑作短編集（一）松本清張

当表題作は木々高太郎（慶應医学部卒探偵作家）の推薦により昭和27年『三田文学』に発表され、翌28年に芥川賞を受賞した。清張44歳の時の出世作。

あらすじ

明治32年から3年間、森鷗外は小倉に赴任していたが当時の日記が見つからない。昭和初期、鷗外の文章に共鳴していた田上耕作（明治42年生まれ）はその事実を知り『小倉日記』の空白を埋めようと決意する。

耕作は子供の時から身体に障害があり、この作業は困難を極めるが、母親ふじが彼の手となり足となり二人で小倉時代の鷗外を知る関係者を探し出し、資料集めに躍起になる。次第に資料の嵩は増えていくが空襲そして終戦と、資料集めどころでなくなる。戦後の貧困と食料難がもともとの彼の病気を進行させる。足で集めた彼の『小倉日記』である、風呂敷包一杯の草稿を残し、昭和25年暮れ、息を引き取る。

「昭和26年2月、東京で鷗外の『小倉日記』発見される。田上耕作が、この事実を知らずに死んだのは、不幸か幸福かわからない」の文で本著は終わる。

解説：平野謙　かねがね私は、清張の文学のエッセンスはその短編小説にある、と信じている。この作品は一種の実名小説、モデル小説、である。作者の強い自己投影があり、作者はほとんど私小説を書くように、この小説を書いている。

### 2. 松本清張

#### ・略歴

1909年福岡県北九州市小倉生まれ。高等小学校卒業後、給仕・石板画工を経て、39年朝日新聞九州支社に意匠係として入社。家が貧しく学歴がないために差別され続ける。

50年、懸賞小説に応募し入選した『西郷札』が直木賞候補となる。作家デビューは41歳と遅咲き。58年（49歳）発表の『点と線』（発行部数322万部）、『眼の壁』がベストセラーになったのをきっかけに清張ブームが起きる。その後、ミステリーから古代史、近・現代史の分野にも進出。旺盛な執筆活動を続ける。92年、肝臓がんで死去。

享年82歳。死の直前まで創作へ情熱を燃やし続けた文字通り生涯現役の人であった。

#### ・著作

「砂の器」「ゼロの焦点」「天城越え」「張り込み」「無宿人別帳」「日本の黒い霧」

「昭和史発掘」「古代史疑」「神々の乱心」（未完・絶筆）

デビューから40年間の作品総数は1000編にも及ぶ。1社の出版社の文庫だけで4580万部、映画化36本、ドラマは500本以上作られる。

・社会派推理小説

怪奇の要素が強かった戦前の探偵小説に対し、日常生活に潜む犯罪の謎と恐怖をリアルに描きだす。犯罪の動機を重視することによって、犯罪者の人間的な側面に光を当て推理小説より文学的なものに近づけた。

『点と線』（発行部数 322 万部）で社会派推理小説のジャンルを確立（49 歳）。

当著の成功がなかったらその後ノンフィクションを書く機会や舞台もあたえられなかったし、またその後の活躍により国民的作家にもなれなかった（担当編集者宮田稔栄）。

○ 松本清張を今回取り上げた理由

・『三田文学名作選』創刊 100 年（2010 年刊）に収録の「或る『小倉日記』伝」が強く印象に残っていた。

小倉時代の鷗外の事跡を求めて歩く、ハンディを抱えた主人公の熱意、そしてそれを支える慎ましくも強い母親、しかしその努力が報われない。胸を打たれる作品。

・「没後 30 年（2022 年）でもなお、戦後日本文学界の巨人と称され着目される松本清張」として取り上げた NHK テレビ番組を見て清張作品の質、量、ジャンルの豊富なことを再認識させられた（「知恵泉」7 月 28 日 8 月 2 日、「新日本風土記」8 月 5 日放映）。

○『点と線』を久々に読み返したが、官僚と業者の癒着という今日性を失っていない社会的テーマであり、追われるのは富める者とエリート、追及していくのは下積みのノンキャリアと昔も今も変わらぬ格差社会の現実、今読んでも新しい。

○清張作品ついて嫌いとか苦手という声、その他本日の出席者からいろいろなお話が聞け新発見もありました。ありがとうございました。

2022. 12. 8

読書会 佐藤博信